

Tsuda Today

index

- 21 新学長就任挨拶
- 22 前学長退任挨拶
学長補佐体制について
- 23 大学改革
活動報告 — 国際青年育成交流事業に参加 —
- 24 津田梅子記念会&ホームカミングデー報告
- 24 第5回高校生エッセイ・コンテスト結果発表
- 26 BILLBOARD
特色GPに採択・フォーラム開催 / 企画展 /
最終講義 / 寄付 / 理事会・評議員会報告 /
学生生活課からのお知らせ / 新刊紹介
- 28 公開講座 / コンテスト

発行日 2004年11月30日
発行 津田塾大学
編集 企画広報課
〒187-8577
東京都小平市津田町2-1-1
Tel. 042-342-5113
Fax. 042-342-5121
<http://www.tsuda.ac.jp>

新学長に飯野正子教授が就任

すべての教員・職員とともに さらなる前進をめざして

本年10月末の志村尚子前学長の任期満了に伴い、本学の新しい学長に英文学科の飯野正子教授が就任されました。任期は2004年11月1日から2008年10月31日までの4年間です。就任にあたり、新学長にご挨拶をお願いしました。

ご挨拶 就任にあたって

学長 飯野 正子



飯野 正子 新学長

8年間にわたり津田塾大学学長として立派なご見識とお人柄で津田塾大学にご尽力くださいました志村尚子先生のあとを受け、11月1日をもって学長に就任することとなりました。2004年度海外研修で4月から1年間の予定で滞在しておりましたカリフォルニアから急遽帰国してこの任をお受けすることになり、自らの非力さを省み、その責任の重みに身の引き締まる思いであります。

しかし、このような場と機会をお与えいただきましたからには、津田塾大学の発展のために全力を尽くしたいと存じます。

18歳人口の減少に伴う大学の危機が叫ばれるようになってかなりの時が経ち、大学はいずれもいろいろな改革に取り組んでいます。津田塾大学も、志村前学長のリーダーシップのもとで全学の教員と職員が協力しながら、大学をよりよくするために努力してきました。多文化・国際協力コースの設置はその一例ですし、各学科もそれぞれに改革をめざして多方面にわたる努力をさらに重ねつつあります。そのような大学内部での努力が反映して、「学生の満足度」や「就職に強い大学」などといった尺度での津田塾大学の評価は社会において相変わらず高く、心強いことです。

また、本年度、優れた大学教育を財政支援し、高等教育のさらなる活性化を図るため文部科学省が募集した「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に、津田塾大学は「発展し続ける

英語教育プログラム — ボーダーレス時代の多様なニーズに応えて — 」というテーマで応募し、採択されました。これも教員・職員の努力が実ったものとして喜ばしいニュースです。津田塾大学の教育目標である「学生の自主性の尊重、少人数教育、高度な専門性と幅広い教養の融合、国際性」を達成するための英語教育が効果を上げていると認められた、つまり本学では当たり前になっていた教育目標が実際に有効であり、他大学の見本になるということが外部にも認識されたことは、私たちにとても大きな励みでもあります。

学生として本学で教えを受けたことを、私自身、誇らしく思い感謝しておりますが、それは、「よい教育をしている」という自信を持ち喜びを味わっている「熱心な先生」方と、献身的な職員に恵まれたからこそだと思っております。学生時代のこの「感動」を次の世代に伝えることは私個人の役目であるとの気持ちで、本学の教員としての長い期間、学生に接することで、その役目をいくらかでも果たせることを幸運に思っておりまいた。このたび、学長の立場におかれまことは、その役目をさらに進めるようにとのご指示だと受け止めております。

本学創立100周年を記念して出版された本のひとつ、『津田梅子を支えた人びと』には、梅子先生を重要なところでしっかりと支え、本学の発展に尽くした人びとが描かれていますが、これからの4年間、私自身が、皆さまとともに「支えた人びと」のひとりになるつもりで、微力ではありますが本学のために働きたいと考えております。

これまで津田塾大学の歴史を作ってくれた先達から学び、成し遂げられたものをしっかりと守りながら、教員・職員の皆さまと将来の夢を語り合いつつ、前進していきたいと思っておりますので、どうぞ、皆さまのご助言とお力添えをお願い申し上げます。

略 歴

学歴

1966年 3月 津田塾大学学芸学部英文学科卒業
1966年 7月 フルブライト奨学生として留学、Syracuse大学大学院歴史学科入学
1968年 6月 Syracuse大学大学院歴史学科修士課程修了(MA取得)
1969年 3月まで 同 博士課程在籍(専攻:アメリカ史)

職歴

1969年 4月 津田塾大学学芸学部英文学科非常勤講師(1978年3月まで)
1978年 4月 同 専任講師
1981年10月 同 助教授
1991年 4月 同 教授(現在に至る)
この間、McGill大学客員助教授、Acadia大学客員教授、California大学Berkeley校客員研究員などを歴任

学内役職

1997年 4月～1999年 3月 言語文化研究所長
2001年 4月～2002年 3月 文学研究科委員長
2002年 4月～2004年 3月 英文学科 学科主任

審議会等公的機関における活動

1990年 4月～現在 日本カナダ学会役員
1991年 9月～現在 日本移民学会役員
1992年 4月～1994年 3月 日本アメリカ学会評議員
1994年 4月～2000年 3月 同 理事
1995年 4月～現在 財団法人かながわ学術研究交流財団理事
1995年11月～2001年 1月 外務省海外移住審議会委員
1996年 4月～2000年 3月 日本カナダ学会会長
1997年 4月～2001年 3月 政府諮問委員会「日加フォーラム」委員
2000年 4月～現在 日本アメリカ学会常務理事

受賞

1997年 3月 カナダ首相出版賞受賞
2001年 5月 国際カナダ研究カナダ総督賞受賞

研究業績については<http://www.tsuda.ac.jp>をご参照ください

ご退任

志村尚子学長、任期満了



志村 尚子 前学長

志村尚子先生は1995年に本学教授にご就任され、1996年11月からは2期8年にわたり、大学を取り巻く環境が激しく変化する困難な時期に、学長として本学の大学運営にご尽力くださいました。

任期満了に伴い、10月31日をもって退任された志村先生に、心から感謝の意を表します。

学長としての8年をふり返って

志村 尚子

このたび10月末日をもって学長としての2期8年を満了し津田塾大学にお別れを告げることとなりました。

私が長い海外滞在から帰国して母塾に教授として迎えていただきましたのは学長就任のわずか1年半ほど前でした。従ってほとんどの教職員の皆さまより本学での経験ははるかに乏しく、この思いがけない重責に自己の不十分さを痛感しながらの出発でした。この8年間、教職員の方々のご尽力、理事会、評議員会のご理解、そして卒業生、在学生、ご父母の皆さまのご支援のおかげで何とか任期を全うすることが出来ましたことに心から感謝申し上げます。

この8年間の主な出来事を振り返ってみますと、最も津田塾の歴史にとって重要で、また私の思い出に残りましたのは言うまでもなく2000年に行われた一連の創立100周年記念行事、事業でした。そして主な事業としての津田梅子記念交流館は多くの方々のご寄付によって竣工し、同窓生や地域との交流の強化をめざしております。映画「夢は時をこえて」や梅子スピーチのCD化も話題をよび、日本女子大、東京女子医科大と協力して「私立の女子高等教育の創始100周年記念」の記念切手も発行されました。この年にはじまった高校生エッセイ・コンテストも新しい伝統となり、次の世代への期待を高めるものとなっています。

教学面の改革としては長い検討と準備を経て2003年に「多文化・

国際協力コース」が発足しました。英文・国際関係両学科乗り入れコースでフィールドワークなどを重視して将来海外の現場などで活躍する人材を育成しようとするものです。ますます厳しさを増す大学を取り巻く環境の中で、生き残りをかけさらなる発展をめざして大学改革を継続的に進める基礎と考えています。

これは年々強化される大学に対する第三者評価の流れ、アカウンタビリティの要求からも避けて通れないことです。本学も2003年に大学基準協会の相互評価を受け、同協会の大学基準に合致しているとの評価を受けました。いくつかの点に関する助言は真摯に検討していかなければならないと考えています。

大学と学生の活動の場を広げる他大学との協定もますます活発になりました。一番歴史の古いTAC(ICU、東京経済大、国立音楽大、武蔵野美術大、本学(以下省略))に加え一橋大との単位互換、アフガニスタン女性教員支援のための5女子大学コンソーシアム(お茶の水女子大、奈良女子大、日本女子大、東京女子大)、EU研究のためのコンソーシアム(一橋大、東京外国語大、ICU)などです。本学自身の国際交流も2001年の国際センター設置以来協定校がさらに増え16校に達しました。

ユニークな国際交流の一例として、2002年に「アンクルトムの小屋」出版150周年を記念してストウ夫人センターから世界各国にはなみずきを植樹したおり、日本では本学が選ばれ、今若木が順調に育っております。

学内施設、設備の改善も進み、中庭の整備、図書館書庫の増築、さくらんぼ保育所の改築、学生食堂の改装、ハーツホン・ホールの瓦の葺き替えと窓枠取替えなどが次々に進められました。2001年にはハーツホン・ホールが東京都選定歴史的建造物に指定されました。

1999年に中島文雄元学長がご逝去になりました。

1997年に天満美智子元学長が勲三等宝冠章を受章され、2001年には中根千枝先生が文化勲章を、2002年には大庭みな子氏が勲三等瑞宝章を受章されました。

何かにつけて梅子先生の建学の志に思いをはせ、それを引き継ぎ、時代に沿って活かしてこられた、そして今活かすべく尽力していただけるすべての関係者の方々に感謝の尽きない8年間でした。心からお礼申し上げます。

学長補佐体制について

2005年1月から新たな教授3名が学長補佐に

飯野学長の下での学長補佐体制については、12月末日までは島村礼子英文学科教授、加納弘勝国際関係学科教授、丹羽敏雄情報数理科教授が引き続き学長補佐を担当し、2005年1月からは、高橋裕子英文学科教授(広報・学生担当)、小倉充夫国際関係学科教授(学務担当)、大槻真情報数理科教授(財務担当)が担当することになります。



高橋 裕子 教授



小倉 充夫 教授



大槻 真 教授

大学改革

2006年4月、「数学科」と「情報科学科」を新設

情報数理科学科主任 安藤 茂

現在の情報数理科学科は、2006年度から「数学科」と「情報科学科」という2つの独立した新しい学科として生まれ変わることになりました。

現在の情報数理科学科の元となったのは、1943年に設置された「津田塾専門学校理科」です。戦後、本学が新制津田塾大学になるにともない、「数学科」としての歩みを始め、卒業生は、研究者、数学教員、企業の研究開発職など、様々な分野で活躍してきました。

1960年代から、日本での電子計算機の利用が本格化し、数学分野の多くの人々が、ソフトウェア関連の仕事を手がけるようになりました。本学数学科の卒業生も、企業などでその方面の職務につく例が多くなりました。70年代には、本学に計算センターが設立され、数学科の学生の計算機実習も広く行えるようになり、大学事務にも次第に計算機が使われるようになってきました。また、70年代末に、計算機科学そのものを専門とする先生が数学科に着任され、情報分野の最先端の動きを常に視野に入れた、本格的な計算機教育ができるようになったことは、その後の本学の教育にとって大きな意味を持ちました。

80年代に入ると、パソコンが世の中に普及しはじめ、それまで一部の専門家のものであったコンピュータに、興味のある人は誰でも触れられる時代となりました。数学教育のなかでも、パソコンのグラフィック機能などが活用されるようになり、「数学科」としては、コン

活動報告 / 国際青年育成交流事業に参加

「イスラムの国」モロッコで再確認したこと



永井 揚子

国際関係学科4年

今年の9月、内閣府主催の国際青年育成交流事業に参加し、約1ヶ月間モロッコで過ごした。今回の派遣を通じて、私は当初の目標であった「face-to-faceによる文化交流」－実際に現地へ行き、現地の方と触れ合うことでお互いが感じることでできる異文化理解－を、自分なりに達成できたと感じている。これまで様々な国を訪れ、異文化体験に慣れていると自負していたが、初めて「カルチャー・ショック」を受けた。今回経験し感じたことの中から見出した「メッセージ」を、自分なりに振り返りたいと思う。

「イスラム」－この言葉を聞いて、まず思い浮かべることは何だろう。「常に戦争をしている」「閉ざされた社会」－近年のメディアやニュースの影響だろうか、友人や知人からはこのような答えが返ってくる。それは私自身も例外ではなかった。しかし実際に現地を訪れてみると、訪問先での第一声は「マルハバビーコム(ようこそ)!」であった。「閉ざされた社会」どころか、むしろ「来るもの拒まず」といった風なのである。

またある時、ホストシスターと買い物に出掛けた時のこと。道の片隅で座り込み、物乞いをする老婆を目にした。通り過ぎようとする私の横で、ホストシスターは彼女に笑顔でいくらかのコインを手渡し、モロッコ式挨拶のキスをしたのである。私は驚いた。日本でこのような行為をする日本人はいるだろうか?私は彼女の気遣いに心打たれた。

ピュータと接する機会をかなり多く提供することができました。

80年代の後半になると、現在のインターネットにつながる、ネットワークの技術が次第に重要性を増してきましたが、本学では、計算機科学を専門とする数学科教員の尽力により、この時代の動きを、教育内容や計算機環境にいち早く反映させていくことができました。このころから、本学は「数学科」という名称の範囲を超えた本格的な情報科学教育を維持発展させていくこととなります。

1991年度から「数学コース」と「情報コース」の2コース制を採用し、96年度から学科名を「情報数理科学科」と改めたのは、いずれも、数学の専門教育に劣らず、情報科学においても本格的な専門教育を行っていることについて、対外的に理解を得るというのが1つの目的でした。そのもとで約10年、様々の努力を重ねてきましたが、当時からの教育内容の変化や、世の中全体で、数学と情報科学が、互いにかなり離れた分野であると受け止められるようになってきたことなどを踏まえ、1つの学科で数学から情報科学までカバーする、という形よりは、2つの独立した分野の学科として互いに協力しあうという形の方が、より自然でありかつ発展性があるとの認識が、学科内で次第に深まってきました。

今回、学内の各方面のご理解も得て、2学科の新設に至りましたが、これによって、今後の世の中のニーズ、学生たちのニーズにより適合した研究・教育の態勢が整い、津田塾大学の新たな発展に寄与できることを期待しております。



今回の派遣を通して改めて重要であると感じたことは、先入観や偏見ではなく、実際に自分の目で確かめ、感じるように努めること、そして「違い」を「個性」として捉えるということである。砂漠、海岸沿い、都市、地方...モロッコは、一国の中に複数の顔を持っている。当然ながらそれぞれの地域では、街の雰囲気から人々の生活様式に至るまで全く異なる。しかしモロッコでは、違いを受け入れ、時に上手く融合し、長い歴史を育んできた。このようなモロッコの在り方は、これからの国際社会で応用していくための1つの手本ではないだろうか。世界中の一人ひとりが「違い」を受け入れられる柔軟な姿勢と、先入観を取り払った目を養えたなら、世界はより平和で居心地の良い場所となるだろう。こうした平和の＜輪＞が広がっていくよう、私自身広くそして平等な視点で世界を見つめ、行動していきたい。

「国際青年育成交流事業」とは

日本青年の海外派遣及び外国青年の日本招へいの2つの事業から構成されており、日本青年60名を世界各地域5か国に23日間程度派遣、世界各地域11か国から外国青年約100名を21日間程度招へい。ボランティア活動、福祉活動、伝統文化等の共同体験交流を中心とした拠点滞在型の国際交流活動を実施している。

津田梅子記念会&ホームカミングデー報告

今年も卒業生の皆さんと実りある時間を過ごしました

同窓会副会長・英文学科教授 野口 啓子

10月3日(日)に「津田梅子記念会&ホームカミングデー」が小平キャンパスで開催されました。あいにくの雨模様にもかかわらず、大勢の方がご参集くださいました。

午前の津田梅子記念礼拝では、吉村庄司司祭(滝乃川学園理事長)が「女子教育・女性解放の使命を生きた二人の友愛―梅子と筆子の出会い」と題してお話くださいました。また、ピアニストの上柳明子氏が筆子ゆかりの「天使のピアノ」を用いて、聖歌やバッハの曲を演奏してくださいました。

午後の部は第5回高校生エッセイ・コンテスト最優秀者表彰式で幕をあげました。非暴力抵抗を訴えたナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの文章を読み、自分の感じたことや考えたことを手紙形式で自由に書くというものでしたが、最優秀賞には、川端悠介さん(横浜隼人高等学校3年)の英文エッセイが選ばれ、会場で朗読されました。

引き続きシンポジウム「英語教育における小中高の連携」が開かれました。前半は安保尚子氏(東京都立町田高等学校長)、宇都宮聡氏(東京都府中市教育委員会指導主事)、直山木綿子氏(京都市総合教育センター)、Jack Massalski氏(津田塾会講師)の4人



のパネリストをお迎えし、パネル・ディスカッション「中学・高校からひとこと―初等英語教育の課題と展望」(司会:小堀真知子 本学非常勤講師)を行いました。後半は、3部屋に分

かれてのワークショップまたはラウンドテーブルとなりました。「小学生英語のひろば」と題した佐々木ゆり氏(宮城教育大学専任講師)による実践報告、「スーパー・イングリッシュ・ハイスクールの現状」と題した山田宣昭氏(高知県立高知西高等学校教諭)によるラウンドテーブル(司会:植野伸子 桜蔭女子高等学校教諭)、「<世界共通語>としての英語」と題した仲潔氏(大阪外国語大学大学院生)によるワークショップ(司会:佐々木香 愛知県立蒲郡東高等学校教諭)いずれにおいても実りある議論が行われました。さらに今年度の新しい試みとして、OG教員との懇談会が開催され、大学の将来について活発な意見が交わされました。

プログラムと並行して、津田梅子資料室では、企画展「女子高等教育のパイオニア - 星野あいが拓いた道」が、また津田梅子記念交流館では、五十幡知氏による「絵手紙展」が開催されました。

今後もより多くの卒業生に参加していただけることを期待しております。



結果発表

第5回高校生エッセイ・コンテスト結果発表

非暴力抵抗を訴えたナチュラリスト
ヘンリー・デイヴィッド・ソローへ手紙を書こう

第5回高校生エッセイ・コンテストに国内外の高校生から応募をいただき、選考の結果、6名の入賞者が決定しました。

10月3日(日)、津田梅子記念会において最優秀者表彰式が行われ、学長からの表彰に続いて川端悠介さんが受賞作品を朗読しました。



第5回 高校生エッセイ・コンテスト 選考結果

応募総数：49編

内 訳：女性44名 男性 5 名

応募言語：日本語作品16編 英語作品33編

受賞者紹介

最優秀賞 1名 (賞状及び賞金5万円・表彰)

川端 悠介

横浜隼人高等学校3年(神奈川県)[英語]

優秀賞 5名 (賞状及び賞金1万円) アルファベット順

浅井 美歩

南山高等学校女子部3年(愛知県)[英語]

池部 敦

聖徳学園高等学校1年(東京都)[日本語]

宮城 まなみ

球陽高等学校3年(沖縄県)[英語]

宮崎 遥

高松高等学校3年(香川県)[日本語]

田中 絢子

横浜隼人高等学校3年(神奈川県)[英語]

入賞者の作品は、本学ホームページ(<http://www.tsuda.ac.jp>)に掲載しています。

講評

ヘンリー・デイヴィッド・ソローの理想を受け止めた日本の若者たち

第5回 高校生エッセイ・コンテスト

審査委員長・英文学科教授 椿 清文

第5回高校生エッセイ・コンテストに49名の方が応募してくださいました。応募者の方々に、そして教室でヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン』や「市民の抵抗」を取り上げ、生徒の皆さんに、美しい自然を守り愛することの尊さ、そして無謀な戦争に反対することの大切さを喚起くださった先生方に、感謝致します。

今回はソローという、日本では比較的なじみの薄い19世紀のアメリカの思想家を取り上げたために、私たちはこのコンテストに関心を持ってくださる方が少ないのではないかと、内心不安を抱いていました。しかしふたをあげてみると、確かに過去4回のエッセイ・コンテストに比べて数は少なかったとはいえ、ソローの訴えたことをしっかりと受け止めて、21世紀を迎えた人類が如何に生きていくべきかを考えようとする、力のこもったエッセイが続出して、われわれ審査員一同も大いに勇気付けられることになりました。

何よりも精神の自由を大切にする人であったソローは、1845年7月、コンコード郊外のウォールデン池のほとりに自ら小屋を建て、自給自足の生活をはじめました。物が溢れる文明生活の中で人々が本当の自由を見失っていることを知ったソローは、ニュー・イングランドの大自然の中で、豊かな精神の自由を取り戻そうとしたのです。ソローのもう1つの偉大さは、自分以外の人々の自由を守るため

にも、命がけで戦ったことでした。彼は当時アメリカの南部で行われていた奴隷制度と、不正な対メキシコ戦争に反対して、人頭税の支払いを拒否し、投獄されたのです。彼は自由や民主主義というアメリカの理想を自ら否定しようとするアメリカ政府に対して、このような非暴力の方法で抵抗しました。ソローの非暴力抵抗の思想はやがてガンジーやマーティン・ルーサー・キング・ジュニアに受け継がれ、後々まで大きな影響を残すことになりました。

今回最優秀を受賞した作品は、ソローが自らの生き方を通して訴えた2つの理想をよく理解した優れたエッセイでした。2つの理想とは、大自然との交流を通して、文明社会のなかで失われつつある豊かな人間性を回復すること、そして世の中の不正に対して戦う勇氣を持つことです。作者は、人間の貪欲さがかえって人間を不自由な存在にし、戦争のようなものも生み出したことを、ソローを通して理解しています。とくにそのことを、アメリカの若者と戦争や平和について語り合った経験を踏まえて語っていたところは印象的でした。

現在の日本や世界を見ていると、ソローの言ったことが如何に未来を見とおし、未来を正しく予言していたかに驚かされます。われわれがソローから学ぶべきことは、限りなく多いと思われます。そしてソローの存在は私たちに大きな希望を与えてくれるとともに、アメリカという国の奥深さを教えてくれるものでもあると思います。

最優秀賞作品紹介

川端 悠介 横浜隼人高等学校3年(神奈川県)

Dear Mr. Henry David Thoreau,

When I read *Walden; or Life in the Woods*, I was surprised how insightfully you had predicted as early as in 1847 the problems humanity is facing today. This is why many people have recently paid great attention to your ideas. As you pointed out through your penetrating perspective, we humans are sad creatures who are suffocated by the huge amounts of unnecessary things we have produced under the name of industrialization, which in fact are mostly based upon human greed. I now understand that if we shrug off every bit of greediness, as you practiced in the woods, we won't have any conflicts or wars on the earth because they are the embodiment of the human greed.

Last summer I took part in the 6th Japan-US Maritime Youth Exchange Program as one of the six delegates from Japan. With the six American delegates, who were all Navy cadets, we visited many army and navy bases throughout the two countries for twenty days. During the trip, we had serious and harsh discussions every evening about whether wars are justified for creating peace or not. My partner, Scott, had strongly believed that without appealing to arms, peace could never be obtained. However, when we visited Hiroshima, he became speechless. He said he had not known the devastating result of the A-bomb. Only after that moment, did we share the view that we can't build a castle of peace upon a mountain of corpses.

This experience caused me to join the movement of September Eleventh Families for Peaceful Tomorrows because I thought it is time for me to do something for peace. They say, "We individually, and as a group, think violent revenge for the 9-11 deaths is not what we want. We fear that military retaliation will only serve to escalate violence causing other families to lose their loved ones." Each newsletter I receive is crowned with their motto, "Wars are poor chisels for carving out peaceful tomorrows," which is a quote from Reverend Martin Luther King Junior.

Now I clearly see that your message from Walden pond was passed down to Martin Luther King and on to David Potorti, the Chairman of Peaceful Tomorrows. Then the spirit has been passed down to me. I am strongly convinced that no war can be justified to create peace.

Mr. Thoreau, thanks ever so much for your inspiring message. Let me keep on following the track you have made for us. Please continue to be the source of inspiration for us all.

Sincerely,

Yusuke Kawabata

平成16年度 文部科学省

「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に津田塾大学の取組が採択されました

採択された取組名称

発展し続ける英語教育プログラム ―ボーダーレス時代の多様なニーズに応えて―

■ 取組の概要

ボーダーレス化が急速に進む国際社会における「優れた人材」の要件とは何か。それは、高い専門性を備え、英語に堪能であることだと考えています。

その考えに基づき本学では、全学的(英文学科、国際関係学科、情報数理科学科)に、4技能(listening,speaking,reading,writing)のバランスを重視した内容重視の英語教育プログラムに取り組んでおります。

英語運用スキルと高度な専門性の融合を図り、学習意欲を高め、学生のニーズに応える、内容豊かな教材を開発してきました。このような取り組みにより、国際的視野を持ち、IT化の進む時代に即応した発信力を身につけた人材を育成できると考えています。

● 取組の特色

1. 視聴覚リソースを用いた
多彩な内容の授業

2. 3、4年次の多様なニーズに応える
英語演習の授業

3. 体系的に書く訓練により
発信力を培う授業

4. 英語を通して高度な
専門性を培う授業

「特色ある大学教育支援プログラム」フォーラム グローバル化していく英語―昨日、今日、明日―

今回のフォーラムでは グローバル化していく英語―昨日、今日、明日― と題して、卒業生をパネリストに迎えたシンポジウムと津田塾大学の英語教育プロジェクトを紹介するパネルセッションを開催します。

開催日時:12月18日(土)12:00～16:00
会 場:津田塾大学5号館(AVセンター)

●シンポジウム(13:00～15:40)
シンポジウムでは、多方面で活躍している卒業生をパネリストとして迎え、仕事を通じて感じている今の世界的状況における英語使用の位置づけやこれからの英語教育のあり方などについて語っていただきます。

●パネルセッション(12:00～16:00)
特色GPに採択された津田塾大学の英語教育プロジェクトをパネルで紹介します。(自由見学)

詳しくは <http://www.tsuda.ac.jp> をご参照ください。

案 内

最終講義について

前学長の志村尚子先生および国際関係学科の波木居純一先生、長沼秀世先生の最終講義が以下の日程で行われます。皆様どうぞ参加ください。

■前学長 志村 尚子 先生
2005年1月28日(金)13:00～
AVセンター5101 教室
問合先:042-342-5111
(総務課)

■国際関係学科
2005年1月12日(水)14:40～17:00
波木居純一 先生 14:40～
長沼 秀世 先生 15:50～
1号館1階 1111教室
問合先:042-342-5155
(国際関係学科事務室)

寄 付

寄付者ご芳名 ご協力に感謝いたします

寄付金

以下のとおりご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。(11月15日現在)

- 教育研究施設設備充実のため
松田 愛子 殿(英大22回卒) 10,000円
穴澤 素子 殿(国大15回卒) 200円
梅の会 殿(英大3回・数大2回)
(卒業50周年を記念して) 500,000円
- 言語教育のため
匿名 5,000,000円
- キャンパスの草花のネームプレート購入費用として
英大13回・数大12回卒業40周年記念同期会 殿 56,505円

報 告

理事会・ 評議員会開催

理事会および評議員会が下記の通り開催されましたので報告いたします。
第159回理事会・第134回評議員会

日時:2004年10月26日 開催場所:経団連会館

報告事項:

- 1 特色ある大学教育支援プログラム応募結果について
- 2 学費返還訴訟について
- 3 文部科学省学校法人運営調査委員による実地調査について

審議事項:

- 1 学長の選任に関する件
 - 2 2004年度(平成16年度)補正予算(案)に関する件
 - 3 2005年度(平成17年度)学費(案)に関する件
 - 4 評議員の選任等に関する件
 - 5 情報科学科及び数学科の新設に関する件
 - 6 津田塾大学学部学則の一部を改正する学則(案)に関する件
- 以上審議の上、可決承認された。

津田梅子資料室開催レクチャー およびシンポジウム報告

2004年10月3日(日)より開催中の企画展「津田塾大学星野あい記念図書館設立から半世紀 女子高等教育のバイオニア 星野あいが拓いた道」開催に合わせ、関連企画としてレクチャーおよびシンポジウムがそれぞれ開催されました。

2004年度レクチャー

高等教育を求め続けた女性たちの軌跡

津田梅子が印した日本の女子高等教育の第1歩をさらに推進、拡充した星野あいは戦後新制女子大学の昇格に大きく寄与しました。あいが塾長の頃、塾生のひとりが『津田文学』(第24号、1939年)に次のように記しています。「今後女子高等教育機関を男子と平行せしめ、男女協同して社会の改善を企圖するは目下の急務と信ずる」。男女共同参加が叫ばれる現在、日本の女子高等教育の歴史を辿ることは、今後の私たちのあゆみを見つめることに繋がります。

11月11日(木)に津田塾大学1号館にて開催されたレクチャー(講師:佐々木啓子 創造学園大学助教授、司会:野口啓子 本学教授)では、星野あいをはじめ、高等教育の発展に寄与した女性たちの軌跡を通じて日本の女子高等教育の歴史を辿りました。

シンポジウム2004

星 野 あ い を 語 る

津田梅子の志を継いだ津田塾大学第2代学長星野あいは、梅子が印した日本の女子高等教育の第1歩をさらに推進し、拡充するために、その生涯を捧げました。多難な時代を乗り越え、戦後は新制女子大学の昇格に寄与し、また、「大学の心臓」である図書館の設立にも力を注ぎました。

11月20日(土)津田梅子記念交流館で開催されたシンポジウムでは、あいに直接影響を受けられた高野フミ、中村ミチ、上田明子の3氏をお招きして、女子高等教育のバイオニア星野あいが拓いた道のりを語っていただきました。

あいの拓いた道を辿り、その遺産を私たちは現在そして未来にどのように引き継いで行ったらよいのか、あらためて見つめ、考える貴重な機会となりました。

企画展開催中

津田塾大学星野あい記念図書館設立から半世紀
女子高等教育のバイオニア

星野あいが拓いた道



開催期間: 2004年10月3日～2005年9月(観覧無料)
場 所: 津田塾大学津田梅子資料室展示スペース(図書館2階)
開室時間: 9:00～16:00(月曜日～金曜日)
休 室 日: 土曜日、日曜日、祝日、ほか図書館休館日に準ずる(本学創立記念日(9月14日)、大学入試期間、夏期・年末年始の休館期間、臨時休室日等)



おれおれ詐欺に ご注意ください!!

新聞やニュースでおれおれ詐欺について大きく報道されていますが、本学でも未遂事件が数件発生しています。本学には、次のような手口が報告されています。

暴力団を名乗り「娘を拉致しているから、返してほしければ振込みをしろ。」などと脅かしたあとに、若い女性が泣きながら話す

「娘さんの責任で交通事故が発生した。示談金が必要なので振込むように。」

このような連絡が入ったときには、まず本人と連絡し事実確認をしてください。もし、授業時間帯で連絡が取れない場合は、本学へ連絡していただいても結構です。

連絡先: 学生生活課 TEL 042 - 342 - 5132

新刊の ご紹介

Tsuda
Today

▶アメリカの社会運動 CIO史の研究



(彰流社 4,800円 + 税)

著者: 長沼 秀世(本学国際関係学科教授)

日本はこの半世紀いやおうもなくアメリカと強い関わりを持ってきている。またアメリカは巨大な国でありながら振幅の激しい、矛盾と対立に満ちた国である。そんなところから、私は1960年代からアメリカとは何かを考え、それを研究対象としてきた。その問いには今でも答えられるわけではないが、少なくともその一部になるものとしてまとめたのが本書である。

今日のアメリカでは保守的な力が強いが、かつてはリベラルな風潮が盛んであり、その代表的な時代が1930年代、いわゆるニューディールの時代である。そのリベラ

ルな進歩的な様相は、一面ではさまざまな立法に見られるが、それを推進した重要な勢力はCIOに結集した労働者たちだといえる。

現在のアメリカでは労働者の立場は相対的に弱い、しかしなお基本的な団結権、団体交渉権は保持されている。それらは、当時の労働者の運動なしには実現しえなかったものである。また、その影響は、ニューディールを経験したアメリカ人が日本国憲法の原案を作ることによって、今日の日本にもたらされ、労働基本権が維持されているのである。(著者談)

▶大統領選を読む!



(朝日出版社 1,400円 + 税)

著者: 鈴木 健(本学英文文学科助教授)

大統領選の仕組みからキャンペーンの裏表まで、「アメリカ大統領のつくり方」をわかりやすく説明。メディア時代の幕開けの1960年のケネディから、ブッシュとケリーが大激戦を繰り広げた今年までがカバーされています。データが豊富で、欄外に「コーカスとプライマリ」などの大統領選関連用語の解説があります。大統領の英語に関する章では、ゴアの敗北宣言や歴史的な演説とされるケネディの就任演説の抜粋などが対訳付きで掲載。(著者解説)

▶JAZZ 愛すべきジャズメンたちの物語



(ネット武蔵野 1,300円 + 税)

著者: 橋 清文(本学英文文学科教授)

私が大好きなジャズの楽しさを多くの人々に知ってほしい、と思ってこの本を書きました。2部構成の第1部はジャズの基礎知識、第2部では11人の愛すべきジャズメンの人生と音楽を紹介しています。専門であるアメリカの文化や歴史の視点からジャズを論じた点は、一般のジャズ入門書とは一味違うと自負しています。今にもジャズが流れてきそうな楽しい表紙や、数多い洒落たカットも気に入っています。かつてジャズファンだったお父さん世代にもお薦めです。(著者談)

IF YOU'RE INTERESTED...

公開講座

津田梅子記念交流館プログラム

お申込みは、津田梅子記念交流館事務局 ☎042-342-5146 まで

「琵琶と笛によるキリスト生誕の物語」

語りの芸能である琵琶のために、能管演奏者の野中久美子氏が新しく「キリスト生誕の物語」を書き下ろされました。日本の古楽器とキリスト誕生の物語の出会いをお楽しみください。

曲目：琵琶語り「貴き清らかなこの夕べ」～能管と笙とともに～他
この曲をメインに琵琶、能管、笙の独奏、合奏もご紹介します。

演 奏：野中久美子 氏他
日 時：2004年12月3日(金) 18:00～19:30
参加費：1,050円

《間奏 能管 遙かな時空にむけ》
今を去ること二十有余の昔の年、
白百合の匂うばかりに美しき乙
女子あり。
マリアと呼ばれるその娘、神の御
心に叶ひ給ふ、
未来を誓うヨセフと申す男子との
婚儀迎えるその前に、乙女のまま
に身こもれり、
あな不思議やな奇跡我が身に起
したる神を頼みとする故に、
マリアはただただ祈りしる。
ヨセフも信仰篤き人なれば、千々
に乱るる思ひ起え、マリアを伴ひ
旅に出ず。

「パイプオルガンによる クリスマスコンサート」

【プログラム】

パ ッ ハ：パストラーレ BWV590
ブクステフーデ：いかに美しきかな、暁の明星は
BuxWV 223
バルバストル：ノエル「偉大な神よ、汝の慈愛」
モーツァルト：アンダンテ ヘ長調 KV 616 他



演 奏：徳岡めぐみ 氏
日 時：2004年12月6日(月)
17:00～18:30
参加費：無料(申込要)

「音声インプットから導入する『初等英語』 ～歌やチャンツを中心に～」

現在、公立小学校で導入が進んでいる「英語活動」は、「音声」を中心とし、「知識」としてではなく「体験を通して」学ぶという点で、従来の中学校以降での英語教育とは異なるとされています。本講座では、歌やチャンツを活用しての導入からアクティビティへの展開、子どもたちの創造性を刺激するような活動の作り方を、参加者のみなさんに実際に「体験」していただきながら一緒に考えていきたいと思います。

講 師：佐々木ゆり 氏(宮城教育大学助教授)
日 時：2004年12月11日(土) 13:30～15:00
参加費：2,100円

講師プロフィール

2000年の津田梅子記念交流館自主フォーラム「小学生英語のひろば」立ち上げ時からメンバーのひとりであり、「子ども英語クラブ」、「出張授業」においてインストラクターとしてカリキュラム作成およびスタッフ教育に携わる。

「総合2004」—旅—

後期講演予定者

12月 2日(木) 小泉武夫 氏(東京農業大学教授)
9日(木) 秋山 仁 氏(東海大学教授)
16日(木) 須藤 斎 氏(筑波大学博士特別研究員)
1月13日(木) マイク・ロジャース 氏(元ラジオ番組DJ)

授業期間：2004年9月16日(木)～2005年1月13日(木)
日 時：毎週木曜日 13:00～14:30

聴講費用：無料(事前申込不要)

講師の都合などにより、講演予定者が変更になることがあります。

お問い合わせは教務課(TEL.042-342-5130)まで (詳しくは<http://www.tsuda.ac.jp>をご参照ください)

コンテスト

昨年に引き続き、今年も学生を対象にした英語弁論大会を開催します。

「第2回 津田塾大学梅子杯争奪 学生英語弁論大会」開催

津田塾大学英語会は昨年度、多くの方々のご協力とご支援のもと、初めてのスピーチコンテストを主催いたしました。本年も、第2回津田塾大学梅子杯争奪学生英語弁論大会を開催いたします。この大会では全国の大学から参加者を募り、予選審査を経た10名のスピーカーがそれぞれ質の高いスピーチを発表します。大会詳細は右記のとおりです。



開催日時：2004年12月18日(土) 12:30より開始
場 所：津田塾大学特別教室

審査員：東後 勝明 氏(早稲田大学教授)
ジェフリー・C・ミラー 氏(白鳳大学教授)
会田 千恵子 氏(1998年度最優秀スピーカー)

Questioner：エリザベス ダウ 先生(本学英文学科講師)

出 場 者：全国の大学から予選を通過した10名

英語弁論大会と聞きますと固く難しいイメージがあるかもしれませんが、是非いらして実際にご覧ください。「国際化」といわれる中で、英語で自分の思いを自分の言葉で論理的かつわかり易く相手に伝えることの重要性、素晴らしさ、又難しさなどいろいろと感じ取っていただけないかと思います。皆様の过瘾を津田塾大学英語会一同、心よりお待ち申し上げております。